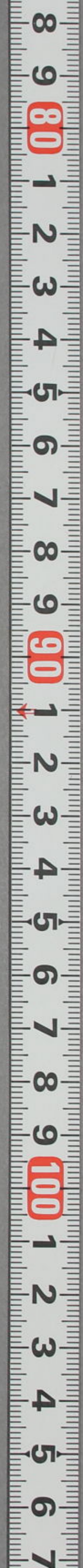


松屋外集

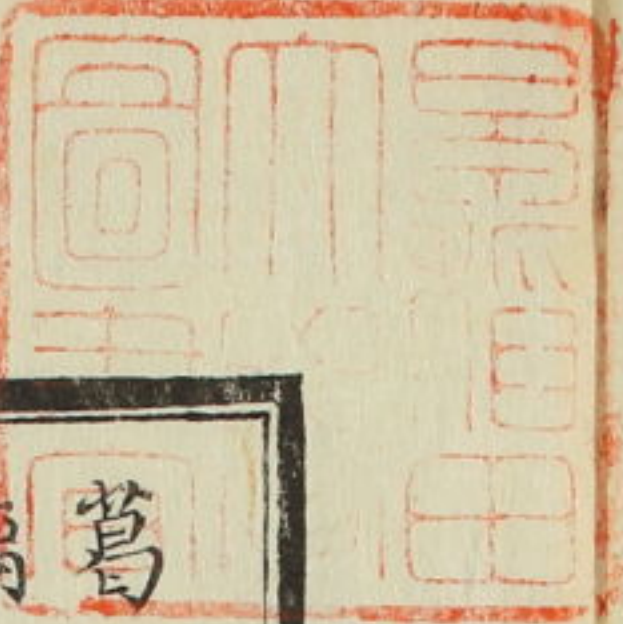
卷一
下

三十七卷

15
1400
2



門 15
1400
2



葛城天狗、唾詞、淨瑠璃小天狗、保元物語、上源平盛衰
 草子、鞍馬天狗、唾詞、胡蝶、上天乃天狗、旅宿、下天の
 草子、淨瑠璃姐、十二段、源平盛衰八、
 小天狗上、法師天狗、源平盛衰八、尼天狗平盛衰、
 天狗法師古今著、天狗小僧、室町殿日、天狗山卧、照
 記、建久七年六月の条、古今著聞、十七、天狗の若山
 聖財集中、太平記、十、後太平記、卅七、
 卧草子、未来記、我慢邪慢の小天狗八、同廿五、善天狗石
 集八、惡天狗上、天竺の天狗昔、廿、震旦の天狗上、日



和名
高田早苗

本第一の犬天狗源平盛八木葉天狗後太平記十七

里人破泥天狗舊本今昔廿荒天狗

鞍馬天狗舊本今昔十七天狗蓋囊八天

狗神祇破偽顯正問谷内裏傳の天狗舊本今天狗

れ矢取草子天狗道古事談三源平盛表記八太平

子鳥帽子天狗の外日蓮録天狗の法長門平家十源平盛

折草子天狗の兵法太平記廿九天狗の姿参考保元

物語下二處大天狗乃姿上天狗の形長門平家四天狗

の顔源平盛天狗のやうな者同十天狗の羽新

犬筑天狗の手古今著天狗の爪小窓雜筆四萩原

波集天狗問答高野大師行天狗の羽音後太平

禽部天狗問答狀画圖二天狗の羽音記十七

天狗根性源平盛表天狗の法草子天狗付小

継古事談三二處叢心集一長門平家十同十二

同十五平家物語八源平盛記廿四同卅四明月記

天福二年天狗の所為同十一同廿六長門平家十

八月の条

二、同十三、續古夏談、五、古今著聞、十七、百
 練抄、五、太平記、二、同廿七、後太平記、廿一、天狗の寝
 化、伯耆の寒室町殿日記、
 十九、北条五代記、七、天狗むけもれ、平治物語
 衰記、十七、
 平記、廿三、天狗人、寝下、長門平
 家、十一、天狗佛小現次、
 昔、廿、天狗の妨門、古今著
 天狗の歌、
 成、舊本今昔、十、
 夢、日蓮錄、
 源平盛衰記、九、義經記、一、
 天狗の旬笑、源平盛
 物語、下、平家物語、二、長門平家、
 天狗の大會、扶桑略
 四、源平盛衰記、九、義經記、一、
 天狗の又せたる夢、外、四、

泉 天狗の迎、舊本今
 条 天狗の落文、應仁別記、
 本朝語園、十、同契纂異、
 五、本朝怪談故事、四、
 天狗、謠詞、鞍馬、天狗、
 謠詞、本朝俚諺、六、
 誓雜談、
 心月、下、鎌倉の天狗堂、太平
 記、十、日光の天狗堂、日光
 来寺の天狗岩、路記、百
 余車、一、熊野の天狗峠、同上、
 奥羽觀迹聞老、天狗のけ橋、東遊雜
 志、六、宮城郡、上、天狗ののけ橋、記、十、
 天狗の乗物、

太平記法師の名の六天狗源平盛衰記十四同十

八人名の大天狗小天狗室町殿日記廿盗の大將の天狗

兵衛梅津長天狗の投算尤草紙上天狗の遊石諸

里人天狗櫻榻鴨曉天狗の髻白頭翁天狗の爪具海燕也

二天狗の手襪草啟蒙十七天狗の腰掛也坂東の方言

蒙四天狗箇坂東天狗の腰掛也坂東の方言

物よええええ名目い多一天狗道よ熱鉄を

吞より佛祖統紀廿三閻摩羅王宮殿条二獄卒

取王撲熱鉄地以銅汁寫置口中とある小似たる

歌よよゑる身吉野拾遺よ内大臣實守公

天物とていはいはなしいとびとる鼻ひく

のらぬ糸ちな糸ね糸ね源氏夢浮橋よてんぐこまな

どやうれも糸とあるも笠澤筆塵一の礼祭法

礼記註疏よ山林川谷丘陵能出雲為風雨見怪物卷四十六

皆曰神此方の人指て天狗といふ。といつてよくよく
 このたつと、新井君美の鬼神論、倭漢三才圖會、山禽
 部、治鳥の条、物部茂卿が天狗説、服部元
 喬の高雄山移文の説、また續太平記三寛正三年、
 まど皆これに隣し、猿樂能の事といつる条、俱賓の所為とあるは、狗
 品より人品の對語ちまゝむを例の音を借て書
 らるゝと、又俗に天狗波旬といふは、天魔波旬の誤
 なるも、波旬と惡者惡意惡法の義と、翻譯名義集の

法華經科註二の 卷上 卷 注せる、天狗の事假寐
 夢三の 卷 類聚名物考、神祇部、六、谷響集、二の 學海餘
 滴九の 卷 牛馬問、二の 結朧録、年山紀聞、六の 閑田耕
 筆三の 卷 論、秋苑日涉十二 卷 みる、星の天狗、
 龍の天狗、獸の天狗、禽の天狗、草の天狗、石の天狗、
 仙の天狗の證を舉ていふたれど、共天狗の字
 は泥を免とむ、年中行支秘抄上 卷 小、月舊記云

天平勝寶五年正月四日。勘□云。黃帝伐蚩尤之時。以此日伐斬之其首者上為天狗也。其身伏而成蛇。靈也。是以風俗此日亥時煮大小豆粥而為天狗祭。於庭中案上。則其粥上凝時。取東向再搯長跪服之。服者終年無疫氣也云云。拾芥抄。歲時部。小豆。世風記を引てしる。此天狗祭も天狗星を祭ると。天狗星の事ハ。執苑日涉。諸書を引ていひたるを。晋書天文志中の説を委とす。正月十五日の餅粥の節供よ

牽合きんがわももや。玉勝間たまがたにハのよよ王わうの鼻びといふ物。天狗面てんこうめんといふれと。猿田彦神さるたひこのかみの御形みかたちあるといふたれど。白氏文集を引て。始よいひたるよ。たのよづの。貴徳樂きとくがくの舞。胡兒こじのこの面おもてまゝく王わうの鼻び也なりといふ。王鼻わうびの事。和語連珠集わごれんしゆしゆ三本朝怪談故事さんほんてうかいだんごし四神道名目類聚抄しんどうなめいりゆいしゆ三さんかかふふふふ也なり。

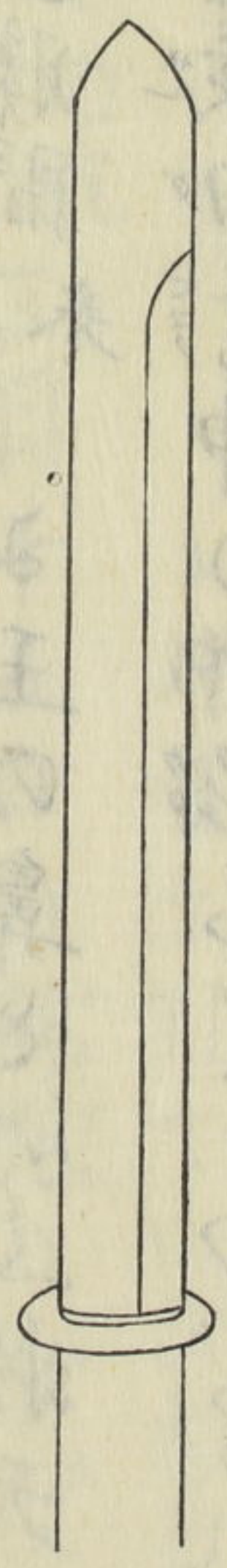
第二鎗棒薙刀考

松屋外集一

三十一

劍ハ物を貫くより乃名ふ都良奴支を約て都
留伎としむ太刀は断切器なれど多知といふ劍
を切先諸刃みてやまのりて片刃なればはらぬ
くふを断切ふも便より市れど劍太刀ともも劍と
れみもいさ也その圖

都留伎^{ツルギ}曰都留伎
太知^{タチ}曰都留伎乃
太知^{タチ}切先諸刃



かくのぞく後の小烏丸の太刀此遺製なる萬葉
集二卷^{卅一}柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女長歌
小劍刀於身副不寐者云云又^{四十一}吉備津采女
死時柿本朝臣人麻呂長歌^{五十八}安積皇子薨之時内舍人大伴
云云同三卷^{丁左}宿祢家持長歌小劍刀腰尔取佩梓弓鞞取負而云
云同四卷^{丁右}笠女郎贈大伴宿祢家持歌小劍太

刀身尔取副常云云又_丁山口女王贈大伴宿祢

家持歌_二劍太刀名惜雲吾者無云云同五卷_{九丁}

山上臣憶良哀世間難住長歌小麻周羅遠乃遠刀

古佐備周等都流岐多智許志爾刀利波积佐都由

美乎多尔伎利物知提云云同九卷_{十九丁}詠水江浦

島子及歌_二劍刀已之心柄云云同十一卷_{十三丁}寄

物陳思歌小劍刀諸刃利足踏云云又劍刀名惜云

云又_{廿六丁}問答歌小劍刀身尔佩副流丈夫也云云

又劍刀諸刃之於荷去觸而云云又劍刀身副妹之

云云同十二卷_{十六丁}寄物陳思歌_二劍太刀名之惜

毛云云同十三卷_{三丁}長歌小劍刀齋祭神二師座

者云云又_{七丁}長歌_二劍刀韞從拔出而伊香期山

云云又_{廿九丁}長歌小劍刀磨之心乎云云同十四卷

_{廿三丁}右未勘國相聞往來歌_二都流伎多知身尔素布

伊毛乎云云同十六卷 十八 境部王詠數種物歌小

蛟龍取將來劔刀毛我云云同十八卷 廿一 大伴宿

祢家持賀陸奥國出金詔書歌小梓弓手尔等里母

知互劔太刀許之尔等里波伎云云同十九卷 十四

慕振勇士之名歌小梓弓須惠布理於許之授矢毛

知千尋射和多之劔刀許思尔等理波伎云云同廿

卷 五十一 家持歌小都流藝多知伊與餘刀具倍之

云云などある皆一種の名少く古事記 中巻景倭

建命御歌小素登賣能登許能辨尔和賀淤岐斯都

流岐能多知曾能多知波夜 熱田大神 云云宇治拾

遺物語六卷 廿二 僧伽多行羅刹國事条小ほるれ

の太刀けよてりちんつるもは百人云云東寺文

書抄二卷寛正四年十月廿二日京進日記小くわ

の刀壹丈一や一壹ほん云云などともあるとされバ

都留伎能多知ともとて都流藝太刀ともを省ハクキては都留
 伎ギといふ事知ヒトべし。神代より劔ツルギとして物を截タガふ
 より又えなれば本朝ミコトノふら不動フドウの利劔リツルギなるとやうの
 都ツて諸モロ又マタなる劔ツルギといふてあるも一也ヒトとてと狗イヌ
 劔ツルギといふハ、万葉集二卷卅四丁右、韓土カラクニの物モノなれ
 ともいひくあるも、冠辭考三卷廿四丁右、小ハ、劔柄ツルギノのこの
 ともともの環ワふよつて、狗劔輪イヌツルギノとけくくするよといふ

古事記上、小故切ノカレキリテ其中ノ尾時ノ御刀ノ之ハ又毀爾思オホキ
 怪アヤシ以テ御刀ノ之前ノ刺割ノ而見者ノ在都牟刈ノ之太刀ノ故取ト
 此太刀ノ思異物ノ而白上ノ於天照大御神也コトハ是者草那ノ
 藝之太刀也トあるは都牟刈ノの都牟刈ノ先ノ此尖ノとして、
 物を貫ツラヌよとてよつていふ、後世ノツブト徹トスからど
 いふツブトとて同語ノなるハ刈断ノ義ノよて都牟刈ノ
 之太刀ノなるは都留伎能多知トといふは、おかつ、冠辭考、

六卷十古事記傳九卷卅なごの説ハいふ盡さる

三丁左五丁左神代記下卷十七小大伴連遠祖天忍日命

来目部遠祖天穗津大来目背負天磐鞞臂著稜威

高柄手提天施弓天羽羽矢及副持八目鳴鏑又帶

頭槌劔而立天孫之前進行降来云云頭槌此云箇

歩豆智云云神武紀十一小道臣命乃起而歌之曰

云云勾鶯都々伊異志都々伊毛智于智氏之夜莽

務時我卒聞歌俱拔其頭椎劔一時殺虜無復噍類

者云云神功紀元年十二歌丁左勾夫菟智能伊多氏

於破孺破云云釋日本紀九卷八丁述義五小頭椎

劔私記曰其頭曲云云同廿三卷十三和歌一小勾

鶯都々伊頭槌也私記曰劔名其頭曲異志都々

伊石槌也私記曰劔名其頭似石也云云同廿四

卷十三和歌二小勾夫菟智劔名也云云日本紀纂

疏下卷 六十九 丁右 小頭槌者劍首如槌也今隼人所帶

之劍有此形也云云神代口訣四卷 四十 丁左 頭槌劍

鋒如槌云云日本紀通證八卷 廿七 丁左 勾驚都々伊

頭椎也見下文驚濁音古事記作久夫都伊及知異

志都々伊毛智持石槌也私記曰劍名其頭似石一

說以頭椎劍摧破強敵比石椎而非別有此劍也云

云古事記 上 卷 小故爾天忍日命天津久米命二人取

負天之石取佩頭椎之太刀取持天之波士弓手

挾天之真鹿兒矢立御前而仕奉云云又 中 卷 神武段

歌小恙都々々斯久米能古賀久夫都々伊々斯都

々伊母知字知豆斯夜麻牟恙都々々斯久米能古

良賀久夫都々伊々斯都々伊母知伊麻字多婆余

良斯云云古事記傳十五卷 七十八 丁右 劍の頭石小

了槌の形小似たると大和國三輪山のあさりの

土中より掘出たりと云を又々々と。谷川氏に
 是は云云。同十九卷丁右。久夫都々伊云云。都々
 伊ハ槌と云ふも。ちち。そも槌を上代ふら常ふら都
 々伊と云ふ。又ハ今歌ふ言の調ふ任せて。延て
 ろくは云々や。あをあづ。さ。此ハ一の刀カキ
 名ふら非も一種の製ふく。此ハ即上は每人佩刀
 とある。其刀等ソノタビドモな。伊斯都々伊母知ハ石推イシツイ以モテな

石推ハ即上の頭推カガツキと一物ヒトモノなり。と彼カキハ形カタチを以モテ
 云る名。此も其石イシ以モテ作ツクる由の名ふ。別物ヒトモノハ
 ちあら。云云。師シも石イシ鞆タビなり。云類イシノトなり。云イシとつ
 き。ど。そも堅カタま意イを以モテ石イシ某ナニと云例レイハ多々オホク作ツクる。み
 ち伊波イハと云イハ云イハ。伊斯イシと云イシふら。私記シキハ其
 頭カギ似ニ石イシと云イハる。非ヒあり云云。なり。えたる。頭推カガツキ
 之太刀タチハ頭カギの廣ヒロクく大オホクふて。槌カキの形カタチハ似ニたる。より

りるなり。ある突貫くたえあるあるで打断せり
よみ造るたえとバツルギとちりごとく
必多知と云づ。其形

頭椎之太刀
名嚴椎之太刀



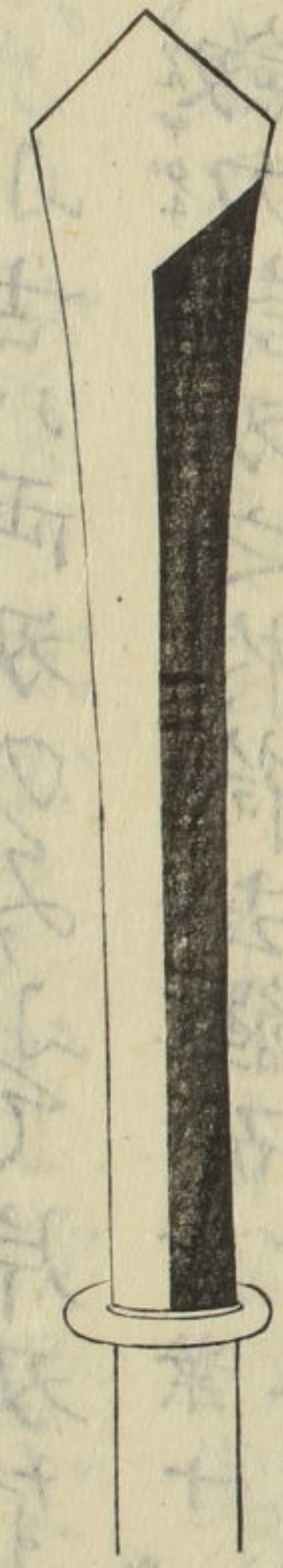
のく頭を重く志す打切小強くあるより便よ
製ちるぐおがは石椎も嚴椎もいふたれよ

の名なり。嚴矛なり。同義ときある由。伊加之の加を
省て伊之都々伊といふ。劔頭を石とて作れり
とのふいふが。古事記傳小頭椎も石椎も同物
異名のよ。古事記上小
於是阿遲志貴高日子根神大怒曰我者愛友故予
来耳何吾比穢死人云而拔所御佩之十掬劔切伏
其喪屋以足蹶離遣此者在美濃國藍見河之河上

喪山之者也其持所切太刀名謂大量六名謂神度
 劍度字云云とある大量神代紀下卷三丁ふも其
 帶劍大葉刈刈此云我里六名神戸劍とあり大量
 の名義ハ未考蓋草木の葉なり刈子便よ此由
 志の名小や草薙劍といふもよりありてきよ由神
 度ハ頭尖なり頭大ふて尖りしゆ急の名ある
 一、加夫と加牟通音なれば頭椎の加夫のつとく

先廣く大オホくして利トあるなるより疑ウタガハシふるの所也
 其圖

神度劍一名
 大葉刈劍



和名抄征戦具部小四聲字苑云似劍而一又曰刀
 大刀和名太知小刀加太奈云云、四聲字苑云
 似刀而兩又曰劍今按僧家所持是也云云、オホ廣

雅云屬鏤劍也。文選讀豆流岐云云。とあるにて片
 刃の大刀字多知といひ。小刀字加多奈といひ。兩
 刃の劍字豆流岐といふ。差別明なる。冠辭考の六
 卷 古事記傳 九の 小古ハ兩刃のみして。片刃なるの
 刀諸刃利足踏同上なごある。小据て感つる。片刃
 のを加多奈といひ。片カ雜ナの義より。小刀ハ限カ

まづは名なれど都て小刀小加多奈といひ。大刀
 ふら多知といひ。ちる。近世古墳より掘出る物
 おもつ。片刃の太刀なれど。古代より片刃の製あ
 り。事疑なく。その劍頭の諸刃なるは都留伎太
 知とも。都留伎能多知とも。省て都流伎ともいひ。通
 身片刃のオ大なる。とむ多知オ小なる。ば加多奈といひ。
 ちる。漢土カふも。短刀。長刀。腰刀。などみれ。片刃カなる。

一、事、武備志 百三卷。字、閱、て、知、一、僧家、ふ、も、不、動

の、利、劔、な、ま、ま、な、む、び、て、通、身、兩、刃、の、劔、も、用、た、る、れ

と、普、通、の、劔、太、刀、ハ、必、鋒、を、し、る、も、諸、刃、な、り、な、り、

然、て、男、子、ハ、劔、太、刀、を、帶、る、由、也、其、の、鋒、ハ、柄、を、附

し、と、鋒、と、名、づ、け、る、兵、杖、と、い、は、後、ハ、鑓、と、い、は、れ、也、

女、子、僧、道、ハ、懷、劔、隱、劔、な、ど、の、刀、を、あ、り、し、持、て、お

り、し、柄、字、附、て、薙、刀、と、名、づ、け、兵、杖、を、用、ひ、し、り、

長門本、平家物語 十卷、衣笠、小、ら、か、ま、あ、を、女、刀

と、書、た、り、起、予、ハ、秀、木、と、て、執、持、て、立、る、貌、の、高

く、秀、た、る、由、也、此、名、也、柄、小、ら、木、を、用、ひ、ハ、秀、木、と

い、は、れ、了、金、槍、年中行事秘抄、下卷十一月、鎮

部、ハ、鉞、加、奈、保、己、鉞、保、己、鉞、保、己、乃、佐、文、な、り、也、延

喜、大、神、宮、式、同、兵、庫、式、ハ、鋒、金、戟、料、の、鐵、な、り、也、

木、槍、年中行事秘抄、下卷十一月、鎮、歌、ハ、キ、ボ、コ、

別あり共儀仗軍器不用し鋒は劍の屬字著或

花を著たるもありなり兵庫式に鋒は

物ハ後小棒とよぶ比々羅木八尋矛舊事紀景行

行の類也されと杜谷樹八尋棒根文武大宝

あれどこれも鋒ありと倭名抄刑罰具部小

蔣勳切韻云棒音蚌杖名也字亦作棒俗音方とあ

ふこれなる棒棒通用の字一切經音義十四

打也。或作梧考聲大杖也。說文擊也。從木也。同廿
三の卷二丁右小棒字正宜作梧或亦為棒今經本
作棒字乃是棒杖之棒非打梧字然復有徒手邊作
奉者乃是棒持之字轉遠經意也廣雅曰梧筮也又
有木邊作音者是梧杖之梧字體也同卅八の卷十
丁左小梧麗講及說文云大杖也從木形聲字經從
奉作棒俗字無來處也同七十五の卷十七丁左小
梧木又作棒同電講及大杖也說文梧杖也字從木
稅從活及韻會小補十一の卷講韻の獨音は棒部
頌切說文稅也本作梧從木音聲謂木杖魏志云曹
操為北部尉門左右縣五色梧各十枚今作棒廣韻
又打也或作棒集韻亦作榔棒なごみえくさ知一
棒の倭語ハ齊明紀小ツカナギと訓なる倭名抄
小ハ俗語のバウといふを載られたり又都

恵と云い、看督長の執持る白杖は職原抄、聞書、檢

ふ長トテ、別當ノ器具スル也、皆赤キ狩衣、白キ漢

籍子白杖、漢書諸侯王表、五代史王晏球傳、賈誼新

杖、字、白棒、抱朴子至理篇、三、白棒、南史宋後、景諧

ふと云、類少や體源抄九卷舞譜皇慶軍蘇利古の

執物、白楚とある、同物なと、元亨釋書七十

の讚州刺史高公輔傳、詔公輔、勸理公輔向寺入

殿坐一席、以白杖指揮、曰云云とみる、看督長

の白杖ふひと、ま、平家物語一卷廿九丁右鹿谷段、

法ニ任ヨト、宣旨ヲ被下、其時神人白杖ヲ持テ、彼

聖ガウナジヲシラゲテ、一條ノ大路ヨリ南ヘ、才

ツコシテケリ云云、此、白杖は古事談五卷砂石集二上

卷、地藏之看、太平記参考本卅九卷、神木御歸など

小を出て、神人など、警固の為、執持る白木の

捧ホウなり。漢書十四 諸侯王表注。應劭曰。白槌大杖

也。孟子書曰。可使制梃以撻秦楚。是也。と云えたるれ

ど。白木の捧ホウなり。事知ト。聖ホウの項ホウを志ホウらるる語也。

いたる。白杖ホウと云。打ウチて白状ホウせホウるる語也。

捧ホウふ。鉄テツ捧ホウ。日蓮録外書廿二。参考太平記八。同十

子カナ捧ホウ。参考太平記八。同十七。同廿九。なホウ。

廿二。同卅一。なホウ。金カネ材ザイ捧ホウ。とホウ。同十七。同廿九。なホウ。

捧ホウ。同四。なホウ。堀川夜討。草子二。白シロ柘シヤク植ウエのホウ。

志田草子二。けホウのホウ。参考太平記十七。同廿九。なホウ。

木キノ捧ホウ。北條五代記五。榎ノのホウ。六角捧ノ石突ノ。うホウ。

ぎノ木捧ホウ。青木ノ木捧ホウ。家中竹馬記重編。應仁記三。

守武千句ナ。木捧ホウ。なホウ。あホウ。木捧ホウのホウ。

字面輟耕録廿三。鞠獄ノ条ニ。又ハ。いホウ。捧ホウ。義經記二。太平記卅六。明と。

そホウ折ヒ。為ホウ。木キを裂サキて造ツクるホウ。ゆホウ。佐サ支キ。

棒ボウ。ちホウ。音便ニ。よホウ。也。真木裂サキ榎ノのホウ。

いホウ。和名抄工部ニ。棒ボウ。漢語抄云。散伊都遅。あホウ。

ふホウ。裂サイ榎ノの義ニ。物ヲを打裂ウチ。用モるホウ。榎ノ。

るべし。さく杉材棒太平記 金材棒見 杖宇治拾遺

一金杖舊本今昔廿、宇治拾遺十三 鉄杖酒顛童筋金渡

棒北條五代記五、室町殿日記十九 杖名目枚舉 杖名目枚舉

を流るふ手の名を信田草子、堀川夜打草子、など

小出たて漢籍。金材棒六波羅密 鉄棒琅耶代醉

の鉄杖後漢書、郅惲傳 鉄稍續一切経 杖宋史、韓世忠傳 杖音義八

るべし。の鉄杖は異なることあり。さく馬縞の中

華古今注上 小車輻棒漢朝執金吾 金吾六棒也 以

銅為之黄金塗 兩末謂為金吾御史大夫司隸校尉

亦得執焉御史校尉郡守都尉縣長之類皆以木為

吾焉用以夾車 故謂之車輻一曰形似輻 故謂之車

輻也琅邪代醉編 八の卷、金 小棒者崔正融注 車輻

也漢朝執金吾 六棒也以銅為之 黄金塗兩足

御史大夫司隸校尉亦得執焉形似輻 故曰車輻曹

操為洛陽北部尉乃懸五色棒于門以威豪猾馬縞中華

古今注魏志武帝記一裴松之注子曹瞞傳曰太祖初

入尉解繕治四門造五色棒懸門左右各十餘枚有

犯禁者不避豪彊皆棒殺之魏書七十四卷の卷尔朱榮傳

尔又以人馬逼戰刀不如棒密勒軍士馬上各齎神

棒一枚置於馬側至於戰時不聽斬級以棒棒之而

已慮廢騰逐也北史四十八の卷尔朱榮傳尔朱榮神

上卷
下卷

考合北史六十六卷の卷泉公傳泉公の仲導次子也一名恭云云

及長有武藝高敖曹攻洛州與公力戰拒守矢盡以

棒杖扞之為流矢中目不堪復戰云云三才圖會器用

六子子訶禁棒鈎棒提棒杵棒白棒松子棒狼牙棒右

取堅重木為之長四五尺異名有四曰棒曰榆曰杵

曰捍云云かどおれれ所見おろ棒おろの短う字を

ちたる木といふ事家物語十一同長門本十八盛

書七報恩抄下、明德記、
中室町殿日記十七、
そと長すと引手切て短く

せーよーの名ふや、又ハ手握木の義ふて、
テキキ

づー、倭名抄、織機、具部、 膝、織、知、岐、利、と、み、申、 國、孝徳紀、金巾をコ

倭名抄、冠帽類、部、小、帽、和名 知、岐、利、加、字、不、利、と、有、る、 あど、此、輪、鼓、形、の、物、ふ

いふや、テ、キキ 手握の義とたふ申、契、約、な、千、ギ、リ、と、い、ふ、

神代紀上、陰、神、握、陽、神、之、手、遂、為、夫、婦、と、あ、る、ふ

起オ、キ、詞、と、い、つ、う、 齊明紀、以、梧、戦、と、又、え、 梧コ、

握ツ、ク、小、直、木、ふ、て、加、と、古、ハ、通、音、也、小、物、も、古、と、い、つ、

例ハ、小、瓶、小、馬、小、芝、小、管、小、草、小、芥、小、弓、小、島、小、身

狭ヤ、、小、坂、小、宅、小、松、 ナ、ギ、ハ、直、木、也、神、名

式、上、小、大、和、國、宇、陀、郡、都、賀、那、木、神、社、あ、り、 さ、と、い、

櫛シ、、よ、れ、る、社、名、 や、孝、徳、紀、御、歌、小、舸、娜、紀、都、該、

阿ア、、我、柯、賦、古、麻、 小、直、木、を、馬、の、足、に、結、付、 大、被、小、天、

津ツ、、金、木、 天津神の事、 文、選、東、方、朔、

の答客難の古訓に、筵カナギ注に小枝也倭名抄
 刑罰具部に、鉗以鉄束頸也和名加奈岐カナギ、鉄脰
 沓也和名同上、此ハ金小テ製タルコト、古
 加奈木ハ皆小直木トテ、ちまき木チマキより小一長
 まよりいふト、同部ニ答和名之毛度カノ若木、榎字を以
 小木の義也、色葉字類抄志部、杖和名都恵ツヅとある
 小、答シモト、捶撃也、とみゆ、杖和名都恵とある
 以同属也、今世ギツテイといふものハ答榎の字音

小や、と馬鞭と同物小テ、和名抄鞍馬具部小野
 王按鞭ヒ音篇、和名無、馬笄也、笄ヒ音冊、字、馬槌也、槌ヒ音
 所以笄馬驅遲也、と又由策、左傳文公十三年、同襄
 為笄、韓非子外儲、拂、琅耶代醉、漢書項籍傳、文選、
 篇、笄、說右下傳、拂、編、廿二、敲、賈誼過秦論注、
 朴ボク同上、笄、呂氏春秋、審為篇、漢書、吾丘壽王傳、文選、
 說文、五代史、楚世家、五音集、馬槌、左傳襄公、
 韻、韻會、唐韻、慧琳音義、廿三、馬槌、十七年、注、馬笄、史
 陳餘傳、同劉敬、小笄、說苑、建、大笄、上鞭笄、文選、司馬
 傳、唐書、封常傳、小笄、本篇、大笄、上鞭笄、遷、報、任、安

書韓非子外儲說右下傳唐折筮後漢書鄧禹傳檣捶晉書

書竇執傳元史徐世隆傳盛載擊捶文選賈誼馬檣左傳文公十三年注漢書

記常傳手檣元史世祖紀鞭檣起世因本檣杖漢書匈奴傳注鞭杖蜀志先主傳注吳志黃

蓋傳北史魏世宗紀馬策吳志孫策傳注檣杖注鞭杖注

其の類なり鉄製ふせは和爾雅五の鉄鞭力

十ム千とくえ字面ハ宋史呼延贊傳出三才圖

會器用小其圖を載た大鉄鞭五代志安鉄馬鞭

晉書王鉄檣抱朴子祛疾篇五代史義兒存孝傳同

澄傳東漢世家同楚世家宋史葉元福傳輟

耕録十四忠烈条續資治通馬鍾淮南子道鉄尺元

鑑宋太祖建隆元年六月注馬鍾應訓注鉄尺史

世祖紀矛鋌漢書晁鉄把短矛同後

漢書劉寬傳吏人有過但用蒲鞭罰之とある善

改の設之倭漢朗詠帝王江相公の刑鞭蒲朽堂

空去と作られし出處也之金木梃之木

答仗棒白杖箠筰梃之長短竹木鉄製の之もらめ

ころあれ、つれ、鋒ホウキのやれ、梓シのやれ、武徳編年集

成七卷 永祿七八、ふ八、叁河より、細井勝冬ハコの棒ボウの師シと打

倒せし事に見ゆ

圓光大師画詞傳所載答、
圖、同書所載、千ギリ木圖

矛、槍、稍、戟、鉞、の字いばどり通して保古とよみ

瓊矛ユキボウ、古事記、日本紀、舊事紀、著錄之矛ホウ、舊事紀、古事記、拾遺、茅纏稍チノマキ

日本紀、釋文、平文鉞ヘイモン、左經、金銅鉞キンドウ、百練、赤矛アカボウ、日本紀、黒矛クロボウ

不詳

同、廣矛ヒロボウ、日本紀、釋日、長矛チカボウ、日本紀、日矛ヒボウ、日本紀、櫛頭シヅメ

槍ユヅリ、令義、手鉞テボウ、参考保元物語、盛衰記、庭訓往來、異製

義經紀、四卷十一丁、右、鎌槍カマヤリ、三代、鯨尾槍クジリノボウ、同上、の

名目あり、不空羅索經、四の卷、小、花檣ハナノボウとあるは、花

自在咒經、中卷、小、ハ、魚頭イサノカビの鉞ボウの圖、年中行事、画卷

小、尺由、枝エダある物、後の十文字鐘ジュンの祖ソトといふ、

本朝軍器考、圖說、上、山城國、靜原二宮、社藏、天武

天皇御銚。南都正倉院藏聖武天皇御寶物圖御銚の圖字載たるといふ。いづれも今此鎧の製小隣一御即位調度圖。禮儀類典畫圖卷小。手銚三候銚振銚。插窓自語。振銚ハ吉野記。延舞參語抄。小鹽夫。など書。樂書。小。厭舞とも。のり。皆假借にて。エ。ン。フ。とよむる。太平樂梓秦王梓の圖あり。鎧證あり。といつ。小長鎧刀。刊本。ナガボコと。代名。吾妻鏡。三の。訓。た。と。尺。素。往。来。撮。壞。集。の。遣。刀。を。ヤリ。こ。よ。み。應。仁。別。記。の。長。鎧。な。と。あ。ら。な。や。合。せ。考。ふ。小。ナ。ガ。ヤ。リ。と。訓。づ。ま。な。ら。ぬ。

太平記十五卷 小土矢間ヨリ鎧長刀ヲ差出シテ散々ニ突云云又廿五卷 阿間了願ト名乗テ云云柄ノ長サ一丈許ニ見エタル鎧ヲ馬ノ平頭ニ引添テ云云又廿九卷 鎧ヲ以テ胛骨ヨリ左ノ乳ノ下へ突徹ス突レテ鎧ニ取付指タル打刀ヲ抜ントシケル云云又卅卷 和田ガ中間走懸リテ鎧ノ柄ヲ取ノベテ喉吭ヲ突テツキ倒ス云云又卅七卷 鎧長刀打

物ノ象云云。下學集、器財門、和字 鐘云云。桂川地
 蔵記上 小長鋒者朱鑄、黒塗銀裝束、實天九郎也云
 云。なごえ、後三年、画カ 宗俊、画カ 乃ふ、これ圖あ
 じ、八、堀川院の比、槍ホコ の製カ 變て、今の鐘ヤ の貌カ なる
 ヤリカ といふ名ハ、鎌倉將軍の代よりおこるるな
 る。一、日夏繁高カ の武林原始一 の小、或記曰、右大
 將嘗製長槍、授島津忠久、俗号十文字、といふる、舊

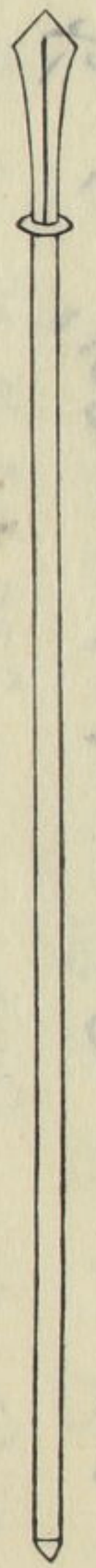
此家牒カ 乃より、据カ する説、小やある、多む、雜々拾遺
 六の、小、和田賢秀、曆應年中、手鋒テホコ より工夫して鐘
 をけくるといふ、倭事始三 の小、楠正成、作カ じつとい
 ふ、其、共カ ような、か、鐘カ の字ハ、遣付ヤ 兵仗ヒョウ する、ハ
 なる心、製カ じつと、り、三才圖會人事 七カ 小、鎗法の
 条あり、その圖カ 載カ たる、本朝カ の製カ 似たる、
 後太平記廿六 小、鎗を五兵の上切とすといふ、

後三年画卷

所載鏡圖

宗俊画卷

所載鏡圖



其製作字のよ、長鏡参考太平記卅八、應仁

記、上、船田前記、甲陽軍鑑、長柄鏡別所長治記、後太平

事、長柄持鏡甲陽軍鑑、七、同十

書、長柄持鏡同十一下、長身鏡甲陽軍鑑、七、同十

代記、大身鏡太閤記、九、倭漢

太閤、十文字手鏡大閤、十文字鏡別所長治記、後太

室町、殿日記、二、同五、甲陽軍鑑、廿、北條五、鑊鏡相州

記、二、永錄記、二、天正記、四、北條五代記、四、光源院殿

同、十一、上、二、片鑊鏡北條五代記、四、常山紀談、西

鑊鏡、倭漢三才、鬼灯鏡守武、錐鏡倭漢三才

素鏡、同、又鏡甲陽軍鑑、九、上、釣鏡北條五

松屋外集一

五十一

記三間鑊北條五代記二尺余鑊室町殿日記三是
 柄長一文許鑊太平記青貝柄鑊甲陽軍竹柄鑊
 三好成立記甲赤鑊室町殿朱柄鑊碎玉話三常山
 陽軍鑑九上赤鑊日記廿朱柄鑊紀談一同二
 白柄鑊碎玉赤尾投鞞鑊太閣記其具字了小鑊
 の鑊參考太平記廿五大内義隆記鑊の柄参考太
 五同卅同卅八同四十二相州兵乱記二三好成立
 記別所長治記後太平記四十二豐太閣御事書甲
 陽軍鑑七同九上同十下同十一一朱鑊黒塗銀装束
 下碎玉話三常山紀談一同二

桂川地鎗の鞞太閣記十七伊達日鑊甲陽軍鑑
 藏記上鎗の鞞記二常山紀談二鑊驗十一下同
 十鎗掛同其用を了小一番鑊北條五代記三小
 九鎗掛七其用を了小一番鑊二處相州兵乱記小
 四後太平記卅二番鑊應仁記後太平三番鑊甲陽
 六常山紀談二慕京集室町殿日記二同三江濃
 十三後太平記卅六鑊合勢州四家記後太平記卅六上
 平記卅六鑊合勢州四家記後太平記卅六上
 鑊江濃勝鎗武具要請鑊室町殿初鑊後太平最初
 鎗大岡記十毛附の鎗後太平助鑊北條五横鑊應
 記北條五代記六室町殿日記一脇鑊室町殿日記
 後太平記廿三大岡記四同十五脇鑊八後太平記

卅六、追鎧後太平相鎧後太平當位の鎧後太平場中
 の鎧同上場論の鎧同上鎧問答同上鎧組北條五代記鎧
 突参考太平記十五同廿九同卅同卅四同卅八細
 川兩家記下大内義隆記長祿記甲陽軍鑑九下
 鎧王大岡記九常山紀談鎧象室町殿日記二上枚
 紀九常山鎧下室町殿日記四同七同八同十二後
 持鎧甲陽軍鑑七大岡役鎧甲陽軍の類もの小お
 ぼく又え鎧奉行甲陽軍鎧持太平記卅新撰犬筑
 波集馬具寸法記

ちや、や、古古は名目ちや、まゝ竹頭竹を殺殺て尖トら
 したると竹鎧竹といふもいと後の物はあらば、室
 殿日記二相州兵乱記二北條五ナギナタ長刀は雜刀とも
 代記六二處倭漢三才圖會廿長刀は雜刀とも
 書よ長くして雜拂ふ兵仗なればさいふちら、奈岐
 ハ長ナガの通音也奈多ハ雜断の略語也源平盛衰記
 四十二卷源平、小武藏房常陸房ヤマホウシ舊山法師ニテ、究
 侍共軍の条、
 竟ノ長刀ノ上手ニテ七八人歩立ニナリ長刀十

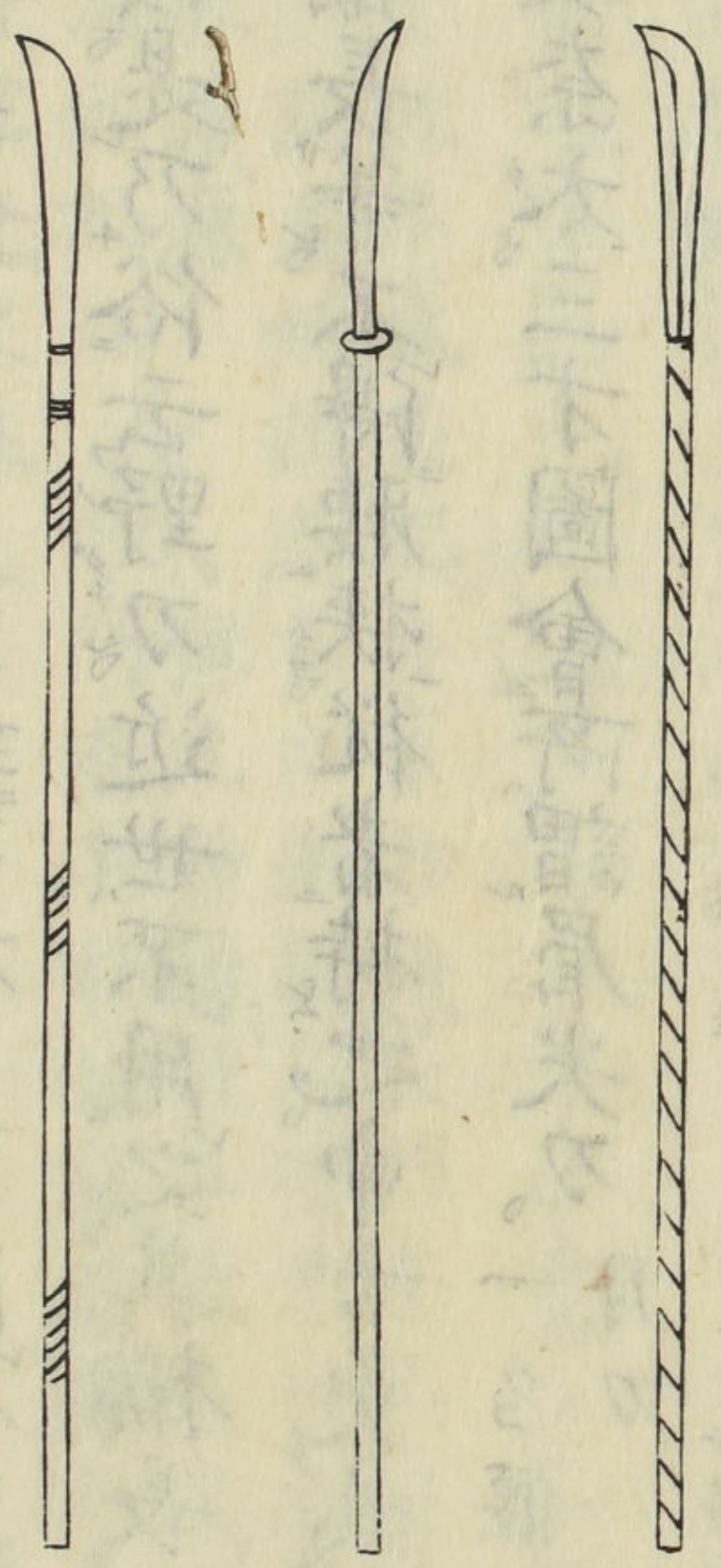
文字ニ採リ、箒木ヲ以テ庭ヲ拂ガ如ク籬入ケレ
 バ、とあふり、長ナガ刀カチも、籬ナギ入イ也。外記日記、
 久安二年三月九日の条、經光驚オドロク而執ツク兵仗ヘイチャウ之ノ奈ナ
 多タ奈ナ云云。愚昧記、久安二年七月十一日此条、奈ナ
 岐ギ刀タチ□柄云云。ちぐみえ、後三年記より、後のもの
 所見ハ、擧アゲ違ヒなり。其圖ハ年中行事、画卷、後三年、
 画卷、圓光大師、畫詞傳、ちぐみえ、け、久安、て、ひと

ちぐみえ

年中行事画卷
所載長刀

後三年画卷
所載長刀

圓光大師画詞
傳所載長刀



倭漢三才圖會 廿一卷 兵部 部 武備志云日本刀有數品。

其大而長柄者乃攝導所用可以殺人謂之先導其以皮條綴刀鞘佩之於肩或執之於手乃隨後所用謂之大制按是乃俗云野刀近世不用之其櫛長三四尺又與櫛長等不得腰扶從者持之中古更為木桿呼曰奈岐奈太三才圖會所謂眉尖刀一名偃與此相似矣或曰始於光仁天皇朝然和名抄有長刀而無薙刀至平相國公時專感眉尖刀之利常列座

右以來尚之如今高家國守之行列備乘輿之後凡長刀為用也可載人可切可擊可揆以兼刀槍棒以為官婦僧醫之重器也といふるいまも盡やくん説也源平盛衰記、平家物語、長門本平家物語、義經記、参考太平記、烏帽子折草子、新撰犬筑波集、應永記、房總治乱記、小長刀、保元物語、源平盛衰記、長記、酒顛童子、草子、文正、銀の蛭卷、志たる大長刀、長記、なつのをおちの草子、同小長刀、上投刀、後三年、異製庭長本平家物語 同小長刀、上投刀、後三年、異製庭長

太刀下學 一文字の長刀甲陽軍鑑 のねのひと柄長

刀信田 小剃又 長刀廻國雜記 異製庭訓往々之

了たる長刀源平盛 白柄長刀平家物語 同長門本

景清草子鞍馬天狗 謠詞室町殿 日菅 蒲形長刀平

記志松物語 後太平記北條五代記 蛭卷たる

長刀平家物語 源冰 の如くたる三尺乃長刀源平

記六尺餘の長刀 太平銀柄 貝鞘長刀桂川地 長刀

の峰太平 長刀の柄長門本 長刀の鞘長門本

語大長刀 の鞘長門本 長刀の石突太平記 景

松物語甲 長刀の目貫長門本 長刀一え

陽軍鑑東寺文書抄 木長刀満仲 長刀堀川夜打

草子信田草子 ながの名目物 小ええ一名打物

いふそと 敵を打物たるゆゑ の名あるよう 愚得随

筆附考上の説也 打物平家物語 長門本長打物 松

物 ちどぐれられし由、義貞記、體源抄、十二 本卷、なごり、長

刀、寸法、まじ、長刀は馬上、少、十徳、カチ、立タチ、九

徳ある、より、な、記せり、長刀持といふ名も、鎌倉年中

行事、馬具寸法記、なごり、イ、出づ、ホコ、戟鎗、ホコ、棒、長刀、共、カラ、漢

土、ま、其製、ま、あ、搦馬突鎗、ツ、雙鈎鎗、ツ、單鈎鎗、

鑲子鎗、ツ、素木鎗、ツ、鷲頂鎗、ツ、錐鎗、ツ、梭鎗、ツ、大寧、ツ、筆鎗、ツ、拐突鎗、

爪鎗、ツ、拐又鎗、ツ、標鎗、ツ、長鎗、ツ、梨花鎗、ツ、掉刀、ツ、戟刀、ツ、龍刀、ツ、鎗、ツ、鎗

鈿短刀、ツ、鎗短錐、ツ、蕨藜鎗、ツ、驢耳刀、ツ、ハ、槍、ツ、鎗ツ、よツ、おツ、れ

ト、ツ、桿、ツ、棒、ツ、訶、ツ、藥、ツ、棒、ツ、大、ツ、棒、ツ、棍、ツ、少、ツ、林、ツ、棍、ツ、鐵、ツ、鏈、ツ、夾、ツ、棒、ツ、提、ツ、棒、ツ、白、ツ、棒、

木、ツ、鎗、ツ、楛、ツ、木、ツ、ツ、棒、ツ、小、ツ、お、ツ、ち、ツ、ツ、釣、ツ、鑿、ツ、刀、ツ、鐵、ツ、釣、ツ、鎗、ツ、屈、ツ、刀、

偃、ツ、月、ツ、刀、ツ、眉、ツ、尖、ツ、刀、ツ、鳳、ツ、嘴、ツ、刀、ツ、筆、ツ、刀、ツ、ツ、は、ツ、長、ツ、刀、ツ、よ、ツ、お、ツ、ち、ツ、ト、

其圖説、ツ、三才圖會、ツ、ツ、無、ツ、用、ツ、部、ツ、武、ツ、備、ツ、志、ツ、ツ、百、ツ、三、ツ、の、ツ、卷、ツ、百、ツ、四、

兵、ツ、仗、ツ、記、ツ、ツ、清、ツ、人、ツ、王、ツ、暉、ツ、撰、ツ、載、ツ、ツ、六、ツ、の、ツ、卷、ツ、鐵、ツ、把、ツ、長、ツ、脚、ツ、鑽、ツ、狼、

牙、ツ、棒、ツ、韞、ツ、鎧、ツ、ツ、ツ、矛、ツ、棒、ツ、の、ツ、屬、ツ、也、ツ、倭、ツ、漢、ツ、三、ツ、才、ツ、圖、ツ、會、ツ、ツ、廿、ツ、一、

部 黒 小長脚鑽、左須末太、又云、琴柱棒、鉄把、今云、鉄棒、
 狼牙棒、今云、毛知利、三才圖會有長脚鑽、鉄把、狼牙
 棒之圖曰、植釘於上、如狼牙者、名狼牙棒、又無、又而
 鉤者曰、鉄把、按長脚鑽有、又可以挾敵曰、刺、又形似
 琴柱、故名、古止知、鉄把、今云、鉄棒也、鉄扱、今云、熊手
 狼牙棒、今云、鉄棒、以上關人門番、必用之、不強、傷於
 捕、以徽索、可、虜、と、み、由、倭名抄、十三卷、征、小、又、六、韜

云、又、初牙、反、兩、岐、鉄、柄、長、六、尺、文、選、又、簇、讀、比、之、今、按、
 簇、即、鏃、字、也、とい、つ、る、又、は、後、の、左、須、末、多、也、室、町、日、
 記、十七卷、小西朝鮮の、要害を攻破る、条、小、菱、の、お、く、鉄、字、以、て、包、
 たる、は、は、ち、の、如、く、ち、る、ち、ぶ、る、木、を、持、し、る、步、
 武者云云、又、十九卷、淡、武、或、は、ひ、糸、を、お、ち、ち、お、し、
 間、近、く、し、は、生、捕、せ、む、と、は、み、く、ね、
 云云、と、み、え、た、色、は、左、須、末、多、古、止、遅、い、と、後、の、

名ふもあらびひ跡すハ銀棒の事やるア釘棒左
 須末太毛知利執鎧ノ行列小執持る貌天正記五
卷小みえ番所ハ鐵把長脚鑽鎧棒カド立並たる
 圖東海道名所記二の卷小載ハ甲陽軍鑑七の卷ハ鎧
 けとあるハ鎧字掛置貞也ヤリナギナタ鎧長刀ノ諸侯
 大夫の行列の儀杖ハ用ハ甲冑字帶テ持セ
ハ兵仗也官衛令義解ハ用之ハ礼容為義仗用之ハ征
 伐為軍器即同實而殊号者儀制令義解ハ用之ハ威

儀故曰儀戈カドみえて今の侯家行列のフル古く鎌倉
 鎧長刀ハ儀仗カド兵仗ハ小もあらびハ古く鎌倉
 年中行事社参条ハ長刀持ハ力者カドあはとど文
 祿慶長の比ハ盛ハ成るカドそは兼應板太閤軍
 記畫小毛鎧鳥毛鎧長刀ハ狭箱カド持せハ行
 列の圖あり又北條五代記の画ハ鎧長刀小鞆
 袋カドをハけハ或ハ毛鎧カド印カド粧ハ立狭箱持カドた
 るハ老人雜話上卷ハ秀頼伏見カド上洛
 毎ハ御幸町通カドを來るハ狭箱カドのハ大きハな

る箱も、人形のあやした有て、錢をいれれば轉倒
るを前より歩行の者負て、輿の先小由く云く、又云
狭箱と云くは、狭竹と云物用くを、大板
の津田長門守は、製りて云く、安齋洗革ふ、
慶長比ヨリカウハザシ袋ヲ用ル事ス夕レテ、竹
ヲワリカケテ衣服ヲ櫛テ持セシトゾ、是ヲハサ
ミ竹トイフ、其後ハサミ竹ヲ止テ、箱ニ衣服ヲ入
テ持セシ也、此箱ハハサミ竹ノ代ニ作り出セシ
物ナルユエ、狭箱ト名付シ也、云く、秋草道具部、
狭箱の事、古ハヤシ物也、古代ハ衣服を上ぎり袋
に入て、供の者持セシ也、古画ニ此体みえたり、
上ぎり袋といハ、衣服をいり袋字、大ふ小ふを
好まざるも、撥て、口小片のてをきて、松緒をい
して、くも也、其袋のやまぬく、糸を少しよ

て、表裏を一ツよと次也、豎横小碁盤の目れや
よさき、是を上ぎりと云也、袋の色上ぎり、寸尺小
小法式なり、昔ハ常よあてふきて、珍しあらぬ物
也、しの此よて、上ぎり袋を持はる事すこと、
慶長の此のやよ、狭竹とて、竹を割りけく、衣服を
はさみ持せしを、いりやみく、衣服をいり箱を
作出して、この狭竹より一だんハ、狭箱と名付しと
ぞ云く、和爾雅五の卷厨箱衣器類部、小狭箱古、近
行人、以竹、挟衣服或袴等、令僕擔之、適寒暖之用、是
彌、狭竹、今嫌其不便、而造箱、其蓋上施棒、令僕擔之、
元、出自、狭竹、故、號、狭箱、蓋、自、慶長、年中、始、云、ハ、書、言、
字、考、器、財、門、波、部、ニ、擲、箱、往、古、行、他、方、人、以、竹、挟、衣、
服、令、僕、擔、之、充、寒、暖、用、謂、之、挿、竹、近、世、據、之、製、狭、箱、
云、ハ、甲、陽、軍、鑑、十、九、の、卷、廿、六、丁、左、ニ、天、正、九、年、四

月、信玄公御他界あり、其秋勝頼公廿八歳ふて、遠州御も、らよの時、草履取廿内、外ノ和者共十五人、挟竹をもち、惣手の跡ノもあはるを、敵方の馬乗三騎、草履取を一人、さる所ノ、残了十四人、挟竹ふて馬乗を一人、打おせし、擲取て、日暮ノ及び金谷一乘、此生捕をさし上申ト云、太閤記、十七卷、前關白秀次公事、糸ノ供奉の人々、具足甲を挟箱ノかゝ入云、遺老物語、八卷、契箱は秀吉の扈從、小野木縫殿助と云者、巧出ノてより、世は弘く傳ノも也、天草征伐の時、あきと軍中、持せらり、大名ノ有とぞ云、常山紀談、二卷、信長の時、挟箱ノ造了始た、又大坂の津田長門守造了、出ノりといふ、かゞ、鉞棒ノツク棒、みえたるも、挟箱の由来、知ノべし、

より、ツクノをわしと、おたる棒ノなれば、あつ、ツクハ、束ノの通音ふて、一、束ノの長の鉄釘ノを打な、ら、た、ち、由、長脚鑽ノ、又、手ノの義ふて、サ、ス、の、名と、み、ゆ、長脚鑽ノハ、又、手ノの吳音なり、ち、知、了、木、柀、棒ノや、ど、乃、圖、々、見、ゆ、此、書、ハ、萬、治、二、年、の、刊、行、な、れ、や、作、者、ハ、小、田、原、北、條、氏、の、末、代、世、ふ、ま、の、あ、つ、了、見、閉、せ、し、事、を、記、し、た、と、バ、永、祿、天、正、の、比、の、證、と、ま、ご、一、参、考、太、平、記、卅の、小、鎗、持、數、多、走、寄、馬、ノ、太、腹、刺、テ、剣、落、サ、セ、と、あ、れ、た、と、鑿、字、持、た、る、

兵士の事として、供鎧の證ふも志の通り、奇異雜談
 集一の、應仁、乱後云云、中間ハ肩衣よのむこの由
 みて、主れ笠を頸より、手鎧をうらぶくしてある由
 く云云、家中竹馬記九丁右、小鎧を持ける事、御出仕
 などの御供ふは、無為の時ふもみえび、但持けま
 じよ法、有づる、應仁の比よ、ハ多分持也、一
 本、一づ、是等皆馬上の跡也云云、新撰犬筑波

集ふ、高野い、此跡の鎧持云云、守武千句猫何
 字、ろをみれど、ヤビ、こ、ま、く、と、り、せ、ぬ、や
 了、ま、や、び、も、の、の、び、く、む、云云、義残後覺一の
 ろち、若黨道具の者云云、此書ハ文禄五年三月の
 著作、小て、道具の者とい、了は鎧長刀持乃事ナギナタモチと同
 由、寛永三年、召列人數覺、二百石、若黨二人、鎧持
 一人、甲箱一人云云、千石、若黨七人、鎧持三人、弓一

東遷ノ字西田平王東遷ナドイハハ當
金ノ反音スルハサレモミナキハハハハハハハ

張鉄炮一挺、甲箱一人、馬取四人、挟箱二人、草履取二人、小者三人云云、などあるを考ふるは、足利將軍の代に末より、供鑓ハ持せられたりや、行列ニ粧立るほどは事ハやうも、文禄慶長やその比、泰平ノ逢一日、諸侯大夫士聚落大坂伏見などに出仕の時の礼容ニ立列し、ものともみ由、とて東遷の後、その礼式定了り、今のおと嚴重みられたるな

る一、甲陽軍鑑ハの巻、十、鑓奉行の名にあり、戰場ふく、乃事やれば、儀仗のをその所役と異也、寶永板の大閤記、小行列、警固番所、の儀仗、鑓、長刀、鈿棒、又手候も、ちま、あど、立並たる、そのあも、寛永の古板本、ふみえ、成る、ば、再板、よ、か、ら、を、加、し、もの、ふ、く、當時の證、に引用、し、る、も、あ、ら、び、や、る、矛槍類の説、倭漢三才圖會廿一の巻、兵器部、本朝軍器考、

七の 小みえたれば合考一、行列の儀仗も、橐鞬
三仗の軍禮に起し、これを建橐といふ。古今
注 上卷、橐鞬、起自周武王之制也。武王伐紂、散鹿
臺之財、發巨橋之粟、歸馬于華山之陽、放牛于桃林
之野、鑄劍戟以為農器、示天下不復用兵。武王以安
必防危、理必防亂、故發弓匣、劍以軍儀、示不忘武也。
舊儀、輜輳三仗、首祿額紅、謂之橐鞬三仗也。通鑑網

目四十八 百廿五 唐憲宗元和十二年、条集覽、具
丁右 橐鞬、出迎此軍禮也。以示尊敬。左傳、右屬橐鞬。注、杜
預曰、橐、韜也。馬上曰鞬。々、建也。言弓矢並建立其中
也。禮樂記曰、武王克殷、倒載于戈、包之以虎皮。將帥
之士、使為諸侯名之曰建。橐、鄭玄曰、包于戈、以虎皮
明能、以武服兵也。建、讀為鞬字之誤也。兵甲之衣曰
橐鞬。橐、言閉藏兵甲也。橐音羔。鞬音巨。展巨偃、二反

又史記樂書曰將率之士使為諸侯名之曰建纛注
 王肅曰所以能纛弓矢而不用者將率之士力也故
 建以為諸侯謂之建纛也今李愬具纛韃出迎蓋取
 此義也かどあふく知_一礼記樂記の説は家
 語辨樂解ふみ申執苑日涉三の小諸侯儀從引
 馬の事をいふなり。
 松屋外集卷之一終



